平成３０年度
学 校 評 価

平成30年度　「自己評価」　・生徒指導・地域連携　ｐ３
・学力向上・進路指導　ｐ５
・特別活動の充実　ｐ７

秋田県立新屋高等学校

あきた型学校評価システムの進め方

学校教育目標　　目指す子ども像

４月～５月

① 目標の設定（Ｐｌａｎ）
・前年度の成果や課題の把握
・重点目標を達成するための**具体的で検証可能な目標の設定**
・目標達成のための具体的方策（教育活動の内容・方法）の設定

・目標と達成のための具体的方策を保護者や地域住民に公表

② 実践（Ｄｏ）
・計画に基づく具体的方策の展開（保護者や地域住民の支援・協力を得て、**学校（園）・家庭・地域が一体となって推進**）

９月～10月

③ 実施状況の中間把握〔中間評価〕（Ｃｈｅｃｋ－１）
・具体的方策の達成状況の確認と判断
・成果と課題の分析

・中間の実施状況を保護者や地域住民に公表

④ 改善方策の実践（Ａｃｔｉｏｎ）
・目標の達成状況をもとに、実践の課題を克服するための改善方策を設定して実践（保護者や地域住民の支援・協力を得て、**学校（園）・家庭・地域が一体となって推進**）

２月

⑤ 自己評価〔年度末の評価〕（Ｃｈｅｃｋ－２）
・達成状況の総合的な評価
・成果と課題の分析

・達成状況の総合的評価及び学校関係者評価を保護者や地域住民に公表

３月

⑥ 次年度への反映
・次年度の目標や教育計画について、方向性や具体的な対応を検討

情報提供
意見聴取
公表
中間の実施状況の公表
学校関係者評価の実施
結果公表
報告書

幼児・児童・生徒　保護者　地域住民

設置者

「あきた型学校評価システムの推進」
（秋田県教育委員会　平成20年６月）

平成３０年度　秋田県立新屋高等学校　教育計画

１　教育目標

教育基本法ならびに学校教育法に則り、真理を希求する心身ともに健康な「知・徳・体」の調和のとれた人格の完成を目指すとともに、「自尊　自知　自制」の校訓のもと、社会の幸福に貢献できる有為な人材を育成する。

２　教育方針

Ⅰ	基本的生活習慣の確立	豊かな感性を培い、品性を重んじ、自律的に行動する人間の育成
Ⅱ	学力の向上	強い目的意識と高い学習意欲をもち、不断の向上を目指す人間の育成
Ⅲ	特別活動の充実	健康な心身を養い、社会的連帯性と創造性をもち、社会の変化に主体的に対応できる人間の育成
Ⅳ	地域への貢献	地域とともに育ち、地域の発展に資する人間の育成

３　経営方針

Ⅰ　教育目標実現のため、「生徒の命を守り、心身ともに健全で自律性に富む人間の育成を図る」ことを本校教育の基本的立場とする。

Ⅱ　重点目標

（１）自主的・自律的態度のもとで、規律正しく行動のできる心豊かな生徒を育てる。

①地域の学校であることを自覚し、地域の人達から信頼され、評価される生徒を育成する。

②校内外で、挨拶、整容、ルール、時間遵守など社会規範を強く意識した行動がとれる生徒を育成する。

③家庭と連携し、必ず朝食を摂るなど規則正しい生活を送ることにより、学校での諸活動に備えられる生徒を育成する。

④危機意識をもって危険回避を常に心がける生徒､および何が高校生として相応しいか自ら考え、判断して行動のできる生徒を育成する。

⑤スクールカウンセラーや関係機関と連携し、教育相談委員会が中心となって問題を抱える生徒を中心に情報を収集し、全職員が情報を共有して適切な指導ができる体制作りに取り組む。

（２）学力向上を図る学習指導を研究・強化し、個々の能力・適性を伸ばすきめ細やかな進路指導のもとで、自主的に学習する生徒を育てる。

①朝学習を 10 分間とし、心を落ち着かせてから授業に取り組ませることにより、学力向上につなげる。

②３分前行動・ベル即授業を励行し、授業の密度を高める。また、机上に不必要なものを置かせないなど、集中力を高める工夫を行う。

③評価項目や手立ての工夫で、評価結果が授業改善に結びつくような授業評価を実施する。

④学習に関するオリエンテーションなどの充実を図り、自学できる態度・習慣を培う。

⑤授業での基礎学力の定着はもとより、併せて補習のあり方を充実させることで、得意教科の強化、不得意教科の克服、最後まであきらめない精神力を養う。

⑥「休養日」の設定や、部活動終了時刻の厳守などにより、学習時間の確保に努める。

⑦教室内環境の整備、校内環境の美化、教室配置の見直し、利用しやすい施設・設備の整備・改善などに取り組み、学習に適した環境作りに努める。

（３）生徒会活動や部活動の活性化を図り、心身ともに健全な生徒を育てる。

①生徒会執行部を中心に、生徒による自主的な行事の企画・運営ができるように指導する。

②日々の練習を通して、主体性や協調性、最後まで頑張り抜く気力・体力を養う。

③創立 40 周年に向かう新高の新たな歴史を築く気概をもって、新高生としての本分を十分尽くせるよう、生徒の自覚を促すとともに、それを支える校内支援体制の充実・強化に取り組む。

（４）キャリア教育の充実を図り、自己の進路目標実現に真剣に取り組む生徒を育てる。

①学級担任は、１年次よりキャリア教育を充実させ、生徒の自主的な進路目標決定を支援し、進路実現に向けて必要となる具体的な取り組みを設定させ、指導する。

②学年部は、生徒一人ひとりの進路目標達成のために力を尽くし、生徒の主体性を尊重しながら適切な指導を行う。

③部活動顧問は、部活動の目標が生徒の個性を伸ばし人格の陶冶のために存在することを肝に銘じ、部活動で培った強い精神力を通して進路の実現を図らせる。

④進路講演会や進路別ガイダンスの開催など、あらゆる機会を通して生徒の多様な進路希望に対応する場を設定する。

⑤「総合的な学習の時間」を、キャリア教育や進路実現につながる実践的な学習の時間として活用する。

平成30年度　学校評価（新屋高校）

評価領域	生徒指導・地域連携

重点目標	自主的・自律的態度を身につけながら、規律正しく行動できる心豊かな生徒を育てる。	P
現状	現在の新屋高校生は２・３年生の上級生になるほど規範意識は高いと思われるが、残念ながら１年生にはまだ幼い面が多く見られ、基本的生活習慣が確立しているとは言いきれないのが現状である。 課題としては、自ら進んであいさつができる、社会に適応できる能力を育んでいく必要性がある。	
具体的な目標	①規範意識向上に努める。②非行、事故の未然防止と問題行動発生時の適切な対応。③学年部・教育相談部・地域・家庭との密接な連携。	
目標達成のための方策	①年度当初のスクールマナー教室で、新屋高校のルールとマナーを全校生徒に共通理解として注意喚起をする。 ②定期的な朝の昇降口指導や整容指導による、正しい身だしなみやあいさつの励行等、習慣化できるような指導の徹底を図る。 ③職員間の共通理解と協力体制を持っての指導を心がけ、地生研や関係機関等の情報や、地域社会との密接な連携と情報交換により、事故や問題行動の未然防止を図る。	
具体的な取組状況	①年度初め新入生を迎え、全校生徒を対象に「スクールマナー教室」を開催し、「高校生活について(生徒・保護者・職員の共通理解)」を通して新屋高校生としてのルールやマナーを生徒はもちろん、保護者にも資料を配付し、職員とともに共通理解として注意喚起を促した。さらには秋田中央警察署生活安全課署員を講師に招き、「携帯電話・スマホ・ネット等による誹謗中傷・いじめの防止」について、ご指導いただいた。 ②生徒会や風紀委員会による朝の昇降口指導や、定期的な整容指導を実施しながら、正しい身だしなみやあいさつの励行等の意識の高揚につながるよう指導した。 ③集会時やＨＲでの連絡を通じて、地生研や関係機関等の情報や高校生による事故の事例などを伝えながら注意喚起を促し、特に新屋駅からの通学路について、地域の一員としての自覚を持たせている。	D
達成状況	①新入生はもちろん、２・３年生にも効果があり、上級生がしっかり校則を遵守することで下級生にもその相乗効果として表れているようだ。「いじめ」も学年部での初期対応により、大きく発展することもなく、早期対応の指導によりほどなく解消している。 ②制服着用や身だしなみの大きな乱れもなく、整容指導による注意や指導には素直に従い、学年部による再指導ですんでいる。あいさつに関しては個人差があり、自ら進んであいさつできない生徒も少なくはなく、今後も地道に根気強い指導が求められる。 ③地域の方から寄せられる声は、苦情というよりも期待や心配をしていただく声が多く、新屋高校が地域密着型の学校だということを生徒一人一人が自覚を持って行動できている表れと考えられる。	

自 己 評 価	（評価） B	（根拠） ①年度初めの「スクールマナー教室」での生徒・保護者・職員の３者間による共通理解を基本として、規範意識の向上につながり、それが日常における学年部や担任からの指導が功を奏しているようだ。深刻な「いじめ」の発生はないものの、その一歩手前となるような「いじりやからかい」がアンケート調査でわかったので、今後より一層の注意や　指導が求められる。 ②朝学習が定着化され、昨年に引き続き大幅な遅刻をする生徒がほとんどなく、あいさつの励行や正しい身だしなみはいくらか向上されたのではないかと思われる。 ③生徒の地域における通学状況の苦情や注意などは、地生研で他校の情報等を聞くかぎり比較的少ない方だが、自転車事故が数件発生していえることを踏まえ、交通ルールやマナーに関しての指導強化を図る必要があり、今後も地域社会と密接に関わる学校として、生徒一人一人の自覚が求められる。	C

↑
評価基準
↓

Ａ：具体的な活動がなされ、目標を達成できた。
Ｂ：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない。
Ｃ：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない。

学校関係者評価と意見	（評価） B	・新屋駅前での二重ロック声かけ時のマナー、態度は以前とは見違えるほど立派になった。 ・地域行事にも積極的な参加は非常に喜ばしいこと。 ・「スクールマナー教室」による社会規範意識の向上は、普段の生徒の言動からもうかがうことができ、指導効果が上がっていると思われる。 ・交通安全指導では、特に自転車通学の交通ルールやマナーに関して特段の指導強化が求められる。 ・学校を訪問した際や地域で出会った生徒の態度は、マナーも良く不愉快を感じたことはない。 ・今後生徒対教師に限らず生徒同士も含め校内外での種々のハラスメントにも十分に留意する必要が求められる。	C

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	「地域の学校、おらほの学校」という観点から、地域の方々には本当に本校生徒が温かい目で見守られながら、評価していただいているということを強く感じている。ただ、時には厳しい目で見られているということも決して忘れてはいけないと思う。規範意識の向上はもちろんであるが、今年度も残念ながら自転車による事故が数件発生してしまったという事実を踏まえ、より一層の交通安全意識の向上を目指し、「身命は尊し」をもっと強調した指導のあり方を展開していかなければと考える。校訓の一つである「自尊」を生徒一人一人が自覚を持って行動できるよう、指導の徹底をしていきたい。	A

平成30年度　学校評価（新屋高校）

評価領域	学力向上・進路指導

重点目標	個々の能力･適性を伸ばすきめ細かな学習指導・進路指導を行い､早期に明確な目標を持ち、その実現のために進んで努力する生徒を育てる。	P
現状	学校全体として落ち着いて授業に取り組み、進学・就職とも実績が上がって来ているが、次のような課題がまだある。 ①授業で生徒の主体的な取り組みを十分に引き出せていない。 ②社会に対する興味・関心・知識が薄い。 ③進路目標設定が遅い。 ④家庭学習の習慣が確立していない生徒が多い。	
具体的な目標	①授業改善　②キャリア教育を通じた精神的な成長･成熟 ③早期の進路目標具体化　④家庭学習時間の増加 ⑤主体的に学びに向かう態度の育成	
目標達成のための方策	①アクテイブラーニング型授業の要素として、生徒同士の主体的、協働的な学習活動を取り入れ、学力を向上させる工夫をする。 ②将来の目標を持たせたる進路講話、職業ガイダンス、進路別ガイダンス、大学模擬授業、総学の活用等。ｷｬﾝﾊﾟｽ訪問(1年生)、職場訪問（2年生）進路に関す読書指導（１・２年生)、朝学習の新聞記事購読(全校)の実施。 ③二・三者面談の充実。ガイダンス等の充実。キャリアアドバイザー（学校独自採用）による積極的な支援。 ④週末課題等、授業に活かせる宿題・課題の工夫。朝学習による自学・自習の定着。「部活動休養日」の確保。夏･冬休み初めの「学習強化期間」の効果的な活用。学習時間調査の実施。 ⑤「キャリア教育手帳」、「e-portfolio」などを活用して学習の振り返りを実施し、学習のＰＤＣＡサイクルの確立を促す。	
具体的な取組状況	①授業改善に向けて、授業アンケート、互見授業を実施。中学校や他高校への授業視察をし各自の授業力向上の参考にした。教育専門監による授業改善研修、大学入試改革に関する職員研修を実施した。 ②進路別ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ(3年生)､進路講演会(1･2年)､職業ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ･ｷｬﾝﾊﾟｽ訪問(1年)､大学模擬授業･職場訪問･ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ(2年)、進路読書指導(1･2年生、進路に関する書籍・郷土に関する書籍)､朝新聞等を実施。 ③二・三者面談、ｷｬﾘｱｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰの職業講話･就職指導。進路検討会(3年)などを実施し　た。 ④各科目でシラバスを配付し内容と進度の見通しを立てられるようにした。週末課題･朝学習実施｡週１日の部活動休養日「ももさだの日」。学習強化期間､放課後の充実。全員模試・TOEIC－Bridgeの実施(１・２年生)。学習時間調査を4回実施し、それに基づいた担任からの声かけや、学年通信による呼びかけ。 ⑤１年生に「キャリア教育手帳」の購入、e-portfolio（「マナビジョン」ベネッセ利用）の導入をした。	D
達成状況	①本年度は、「根拠をふまえ、自らの考えを表現・発表できる生徒を育てる」をテーマに授業改善に努めることができた。 ②進路講話、諸ガイダンス、キャンパス・職場訪問等は、進路目標設定のみならず、職業観や勤労観等の育成に結びついている。進路読書指導、朝新聞も定着してきており、ＡＯ・推薦入試等に臨む土台作りにも役立っている。 ③ｷｬﾘｱｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰのきめ細かな就職指導により、当初から就職を希望していた生徒は	

	年内に全員就職内定し、公務員の合格者も増加した。２年次の学習強化期間にキャリアアドバイザー講話などを実施し就職希望者の意識向上に努めた。 ④夏･冬休みの学習強化期間に、特別の事情のある生徒を除いて１・２年生のほぼ全員が出席した。また、講座内容についても各学年部が効果が出るように工夫して実施した。 ⑤１年生全員に、「キャリア教育手帳」を購入させ、毎週の計画や反省を記入させた。また、定期考査の反省などをe-portfolioに入力させた。		

自 己 評 価	（評価） B	（根拠） 授業内容についての生徒評価は、以前から高かったが、今年度は「授業は、内容が充実しており満足できますか」という問に対して「①そう思う」が38.8%と昨年度の比べ4pt上昇しており、授業改善の効果があったのではないかと思う。また、「夏休み中の学習強化期間はしっかり取り組めましたか」という問に対しても「①そう思う」が53.7%と昨年度より9pt上昇しており、各学年の取り組みが評価されていると思われる。その他の項目についてもおおむね良好で、昨年度より大きく評価が下がっている項目は見受けられない。 保護者アンケートの結果も否定的な意見は少ないが、生徒評価に比べ、「②どちらかといえばそう思う」が多く「①そう思う」が少なくなっている。これは、指導の内容が保護者に届いていないことが原因ではないかと思われる。今後もっと指導・活動内容を外に向けて発信していく必要があるのではないかと思う。	C

↑
評価基準
↓

Ａ：具体的な活動がなされ、目標を達成できた。
Ｂ：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない。
Ｃ：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない。

学校関係者評価と意見	（評価） B	授業改善により生徒の授業満足度が上昇している様子がうかがえる。また、総合的な学習の時間の充実や、補習の効果についても改善されている様子がアンケートからうかがえる。これに対し、図書室・視聴覚室やＩＴ機器の活用については不十分と答える職員も多く改善が必要ではないか。 早期の進路目標設定が必要と思われるので、１年次から保護者との連携を強化し、社会に目を向ける機会を作っていって欲しい。 学校と家庭間の情報が共有・活用されていないようなので改善が必要である。	C

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	授業改善については今後とも生徒の満足度が向上するよう継続して取り組んでいきたい。 次年度の重点目標としては、視聴覚室の活用促進に向けて、使用機材の整備をしていきたい。また、家庭との連携強化のために、紙ベースの「進路通信」に変わる方策を考えていきたい。	A

平成30年度　学校評価（新屋高校）

評価領域	特別活動の充実

重点目標	健康な心身を養い、社会的連帯性と創造性を持ち、社会の変化に主体的に対応できる人間の育成。	P
現状	生徒会活動では、学校行事において多くの生徒に役割を分担して取り組むことで満足度アップにつながるように努め、また地域行事やボランティア活動等にも積極的に参加している。部活動では、昨年度、弓道部の全国大会入賞や東北大会優勝、バドミントン部の６年連続インターハイ出場などの成果を上げた。こうした活躍を部活動全体の活性化につなげていくことが求められる。	
具体的な目標	①生徒会活動の充実　②部活動の活性化　③心身の調和した発達	
目標達成のための方策	①生徒会活動の充実・・・生徒会執行部を中心に、行事の企画・運営が主体的にできるよう導く。地域との交流を深めるため、学校行事等について地域への周知を図る。 ②部活動の活性化・・・全体的なレベルアップ、そして上位大会で活躍できる部の育成のため、学校全体としての支援体制を確立する。各部において適切で合理的な活動が行われるよう各顧問・部員の意識を高める。 ③心身の調和した発達・・・文武両道の精神に則り、学業や部活動に高校生としての本分を尽くせるよう個々の自覚を促し、それぞれの目標に対する意欲を高める。	
具体的な取組状況	①生徒会執行部を中心に、学校行事等の企画・運営を各委員会等と連携しながら主体的に取り組んでいる。ＨＰでの紹介や地域の協力を得ながらポスター掲示するなど、学校行事の周知に努めている。各種ボランティア活動や恒例となっている地域の祭り等に一般生徒からも希望者を募って積極的に参加している。各部がボランティア活動を行う「一部一ボラ運動」を始めた。 ②各部の実績に応じた強化費の配分や各部の実情に応じた外部コーチの委嘱等により部活動の活性化を図った。また事実上活動のない部を休止している。適時、部活動応援誌ＹＥＬＬを発行し、学校全体で部活動を応援する体制を強めようと努めている。 ③百三段の日（部活動休養日）を尊重しながら各部の実情に応じて部休を設定し、効果的に心身の健全な発達を促せるように取り組んでいる。特に考査前や学習強化期間において学習時間確保を徹底している。	D
達成状況	①生徒会活動では、準備期間が短い中で工夫を凝らして取り組んだ新高祭や数年ぶりに実施できたクラス対抗リレーおよび球技でクラスが強く結束した校内体育大会など、各学校行事を全校生徒の力で盛り上げることができた。また、地域行事である日吉山王例大祭や大川散歩道雪祭り、栗田支援学校運動会ボランティア等、地域との交流活動に積極的に参加した。「一部一ボラ運動」は、初年度のため強制ではないが、各部において様々な活動に取り組んだ。 ②今年度は、バドミントン部がインターハイに７年連続出場（女子ダブルス）し、弓道部が全国選抜大会出場（男子個人）および東北大会優勝（女子団体）を果たした。東北大会には、バドミントン部・弓道部の他、サッカー部・水泳部・女子テニス部が出場した。また、バドミントン部・弓道部・サッカー部・水泳部が東北新人大会に出場した。 ③百三段の日や考査前の部休、学習強化期間の定着により学習時間を確保し、部活動との両立ができるよう環境づくりがされている。部活動と進路の両面において明確な目標を掲げて励んでいる生徒が多く見られる。	

自 己 評 価	（評価） B	（根拠）アンケート結果より ①生徒会・ＨＲ・委員会の各活動に関する評価は若干下がっているが、特に大きな行事である新高祭と校内体育大会の満足度を上げることができた。校内体育大会は天候に恵まれたこともあるが、新高祭においては企画・運営の成功の証と考える。しかし芸術鑑賞の満足度が落ちており、生徒の嗜好に左右されるところもあるが、授業との関連や事前の宣伝等に工夫を凝らしていきたい。地域行事への参加やボランティア活動において、引き続き地域との交流を深めていくとともに、今年度より取り組んだ「一部一ボラ運動」を定着させていきたい。 ②中期ビジョンにおいて「毎年複数の競技が全国大会出場」と掲げられている中、今年度はバドミントン部のインターハイ出場、弓道部の全国選抜大会出場と、かろうじて達成している状況である。しかし、あと一息で次の上位大会出場の切符を獲得できたというケースが多々あり、野球部のベスト８進出も含めて、全体的に底上げできているのではないかと思われる。各部が効率的に活動できるように、施設の活用や練習場所の調整等に一層努めていきたい。 ③部活動休養日の設定状況は比較的良好であり、学習時間確保に有効と回答した生徒も増えているが、保護者の視点では両立できているとはいえないようである。教職員アンケートにおいても、家庭学習の定着と特活推薦生徒の指導において、依然として重要度が高く、部活動と学習の両立に向けて顧問のさらなる指導の工夫が求められる。	C

↑
評価基準
↓

Ａ：具体的な活動がなされ、目標を達成できた。
Ｂ：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない。
Ｃ：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない。

学校関係者評価と意見	（評価） B	①新高祭・校内体育大会において各クラスの結束とともに生徒各自の積極的な関わりが認められ、アンケート調査結果でも満足度が向上しており大成功といえる。一部一ボラ運動を含めたボランティア活動や地域行事の参加については、地域として高い評価をしている。活動に関しては有り難いが、まだ自ら進んで参加するという域には達していないように見受けられる。ボランティア活動は高校生活において非常に有意義なものであり、何事にも前向きに取り組み、全力を尽くすものであることを生徒に認識させてもらいたい。 ②部活動の活性化を図る取り組みが全体的な底上げにつながっているものと思われる。バドミントン部・弓道部が県内代表を不動のものとしている一方で、他部においても一層の奮起をお願いしたい。ただ、ハラスメントにならぬよう十分な意識が必要である。 ③部活動と学習の両立については、これでよいという方策はなく、模索しながらも両立できる環境づくりにさらなる工夫を期待したい。	C

自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	学校行事の満足度は上がっているが、生徒会・ＨＲ・委員会の各活動に関する評価が下がっていることから、企画考案や準備の段階でより多くの生徒を巻き込み役割分担するなど、本番のみならず実施前の活動にもさらに工夫を凝らして力を入れていきたい。今年度より取り組んだ「一部一ボラ運動」や他のボランティア活動、地域行事参加について、地域の方々と交流し情報収集する機会を持つなどして、要望等に応じる形の動きも取り入れていきたいと考えている。部活動について、成績に関しては当該顧問に頼るところが大きいが、地域の方々に支えていただきながら、引き続き学校全体で部活動を応援する体制の強化に努めていきたい。学習との両立については、依然として悩みの種であるが、担任や教科担任・学年部の協力を仰ぎながら（ご意見をいただいたように）両立できる環境づくりを模索していきたいと思う。	A